



「あなただけの
ねこバナ。」



1 猫の毛

猫の毛

「これで最後のね」

「ああ、本当だ」

「わかった、じゃあ、これ」

女は、大手銀行の名前が印字された分厚い封筒をテーブルに置き、男の方に滑らせた。

男は、それをさも大切そうに受け取り、鞆に仕舞い込んだ。

「頑張ってね。また連絡ちょうだいね」

「ああ、じゃ、俺急ぐから」

男はそう言うと、早足でその場を後にした。

ネオンが瞬く夜の繁華街を歩きながら、男はひとりほくそ笑んだ。

ぼろ儲けだ。

ちょっと色気を使えばすぐ乗ってきやがる。

しかし、そろそろ潮時だな。あの女からはもう搾り取れないだろう。

さっさとずらかって、次の女を捜すとするか。

大通りに出ると、俺はタクシーを止め、乗り込んだ。

「お客さん、どちらまで」

「東京駅だ。八重洲の方に」

走り出したタクシーの窓の外を、ぎらぎらした光が流れてゆく。

さて次は...と。もうアタリはつけてある。新潟だ。

高級スーツの袖を引き、ロレックスの時計をちらと見る。午後八時五十四分。まだ新幹線に間に合う時間だ。

と、スーツの袖に、綿埃のようなものが付いているのが見えた。

何だこれは。

白く、ふわふわした、綿のようなものだ。心当たりがない。

待てよ、同じようなものを、何処かで見たぞ。そうだ。

あの女の家だ。

* * * * *

1か月程前。

男はその女のマンションを訪れていた。

「全く、どういうことなの。失敗したって」

「だから、俺も精一杯やったんだよ」

男は女に金を無心しに、自宅までやって来たのだ。

「あなたね、五百万も無理して用立てした私の身にもなってよ。主人にばれたらどうするのよ」

「そんなこと言うなよ。次は絶対に成功させるからさ」

「もう無理。これ以上手助けはできないわ」

「おい...」

男は女の手を掴み、ぐいと引き寄せた。

「これが成功すれば、俺も一人前になれる。そうすれば、あんな馬鹿亭主と縁を切ってさ、俺と一緒にになれるじゃないか」

「だって...限界よ」

男は女の耳元で囁いた。

「何も心配いらぬさ。俺はお前と一緒にいたいんだよ」

殺し文句だ。

これで墜ちなかった奴はいない。

女は身を硬直させたまま黙っている。

「ほら」

男は女の身体をまさぐるように手を伸ばした。

その時。

「ふぐっ？」

男の鼻に何かが貼り付いた。

軽い、綿のようなものだ。

男は慌てて女を離し、その妙なものを鼻から払いのけた。

それは、ふわふわと飛んでいる。

「あら、ごめんなさい。サンディの毛だわね」

女がそれを掴んだ。すると、

「にゃあーごる」

足下から鳴き声が聞こえた。

猫だ。

「うっ」

男は後ずさった。

「何？ どうしたの？」

「お前、猫なんか飼ってたのか」

「あら言わなかったっけ？ もう八年になるかしらね」

「そういうことはちゃんと言えよ」

「え...どうということ？...もしかして、あなた、猫が苦手なの？」

「だから何だよ」

「うふふ、そうなの、何でかしらね、こんなに可愛いのに」

女は白い長毛種の猫を抱きかかえた。

猫は、男を青い眼でじっと見つめている。

怖い。

男はさらに後ずさった。

「こら、俺に近づけるなよ」

「いいじゃない、ちょっとくらい。ほーら」

女は猫を男の鼻先に近づけた。

「カーッ！」

「うわああっ！！」

「あらごめんなさい。サンディ、駄目じゃないそんなに脅かしちゃ」

「お、俺、帰るよ」

「そう？ お金はいいのね？」

「ま、また電話するからさ、今日はいいや、じゃ、じゃあな」

男は惨めなほどに慌てて、外へ飛び出した。

* * * * *

そうだ、あの時の猫の毛そっくりだ。

くそう、嫌なこと思い出させやがって。

男は毛を丸めて、運転手めがけて投げつけた。

「おい、でっかい埃が落ちてたぜ」

「あ、そうでしたか？ すみませんねえ」

「すみませんじゃねえよ。ちゃんと掃除しとけよ」

「いやあ、お客さん乗せる前に、掃除機かけたんですけどね。あたし遅番ですから。どんなゴミでしたか？」

「白い毛だよ。猫の」

「猫の毛ですか？」

「あんた猫飼ってんじゃねえの？」

「いいえ、飼ってませんねえ」

「じゃあ、前に猫と一緒に客を乗せたとか」

「さあねえ...。そういう目立つものなら気が付きそうなもんですけど」

「ないのか？」

「ええ。心当たりはありませんねえ」

男は、寒気を感じた。

「毎度どうも」

タクシーを降りて東京駅に降り立つと、冷たく強い風が吹いてきた。

男は風から逃れるように駅に入り、新幹線の券売機に向かった。

すると。

「お急ぎのところ誠にご迷惑をおかけしております。埼玉県内での強風のため、東北・上越・長野の各新幹線は、現在運転を見合わせております」

男は舌打ちした。

出鼻を挫かれた。さっさと東京からトンズラしたかったのに。

駅員が、この強風は今夜一杯続くだろうと、客に話しているのが聞こえる。

全くついてねえ。宿を探すとするか。

踵を返して外に出ようとしたその時。

首筋が、ひくひくと動いた。

誰かが俺を見ている？

振り返ると、売店の陰に、白い猫が座っていた。

こちらを青い目で、睨みつけている。

「にゃあーごる」

耳元で猫の鳴き声が聞こえた。

男は耳元を手で振り払った。そして顔を上げると、猫の姿はもうない。

なんだ気の所為か。

気の所為だ。そうに違いない。

へっ、と息を吐いた。額に脂汗が滲んだ。

* * * * *

男は、八重洲口にほど近いホテルに宿をとった。

部屋に入り、ふう、と溜息を漏らす。

のろのろとスーツを脱ぎ、ベッドにごろんと横になる。

何時の間にか、男は眠りに落ちていた。

暗闇に、青い光がふたつ見える。

光は、ゆっくりと近づいてくる。

男は必死にその光から逃げようと、走る。

しかし足は動かない。

光は近づき、大きくなり、男の身体を青く照らし出した。

光の中から、あの女の顔が見えた。

男を凝視している。

怖い。

「にゃあーごる」

「うわあ」

男は跳ね起きた。

じっとりと汗をかいている。

何だ、気色悪い夢だ。

時計を見ると、11時を少し回ったところだ。

男は汗を拭い、冷蔵庫からビールを取り出して、ひと口飲んだ。

缶を掴んだまま、テレビのスイッチを入れた。

「では次のニュースです。

今日午後9時頃、港区のマンションの入り口付近で、女性が血を流して倒れているのをマンションの住人が発見し、病院に運ばれましたが、全身を強く打っており、間もなく死亡が確認されました。

警察の調べによりますと、この女性はこのマンションに住む〇〇〇〇さん四十三歳で、自宅のある十二階の廊下から転落したものとみられています。警察は、事件と事故の両面で、捜査を続けています」

あの女だ。

自殺したのか。いや、亭主に突き落とされたのか。

ええい。男は首を振った。何を気にしているんだ。俺は関係ない。あの女のことなど。

俺は知らない。知らないぞ。

ビールをぐいと飲み干したが、男の動悸は治まらない。

男は窓のカーテンを開けた。部屋は建物の中庭に面していて、外の風景は見えない。

風がごう、と音を立てた。

「にゃあ————ごる」

男の耳元で猫が鳴いた。

嘘だろ。こんなところに。思わず耳元を払うが、手は空を切る。

「どこだ、どこにいやがる！」

「にゃあ————ごる」

また聞こえる。

男の額から、汗がどっと吹き出した。

辺りを見回すが、猫の姿など見えない。

「にゃあ————ごる」

「うわああああ！」

男は転び、四つん這いになりながらも、部屋を飛び出した。

「はあ、はあ、はあ」

男は深く息を継いだ。何故、何故こんなところに猫が。

それとも俺の頭がおかしくなったのか。

息を整え、部屋に戻ろうとする。が、ドアがロックされて空かない。

くそっ、やっちまった。下着のまま飛び出しちまった。

ドアノブをがちゃがちゃと動かす。

「...あごる」

「ひっ」

また聞こえた。遠くからだ。

まさか。

男は、ゆっくりと、廊下の突き当たりに目を遣った。

白い、青い眼の猫が座っている。

その横には、あの女が。

立っている。

すうっと、女と猫が近づいてくる。

音も立てずに。そのままの姿勢で。だんだんと速度を増して。

「ひ、ひあっ」

男は叫ぼうとしたが、声が出ない。

物凄い速さで、女と猫が男に近づく。

女と猫の姿が、重なってゆく。

女の目が、青色にぎらりと光る。

遂に女＝猫は、男の鼻先にまで近づいた。

男は歯を食いしばり、汗を滝のように流しながら、声も出せず硬直している。

女の額から、つう、と赤い筋が流れた。

その刹那。

「うぐっ」

女は男の首を掴んだ。

ぎりぎりと言を締め上げる。

男は抵抗しようと腕を伸ばすが、女に触れない。

女の眼が光る。青く、鋭く。

「にゃあーごる」

男の鼓膜を鳴き声がつんざく。

男の眼を光が突き刺す。

「にゃあーごる」

男の口の中に、綿のようなものが溜まってゆく。

ずんずんと溜まってゆく。

なんだこれは。

「にゃあーごる」

これは。

猫の毛だ。

喉まで猫の毛だらけだ。

鼻まで。耳まで。

男は激しく手足を動かす。

「にゃあーごる」

「ひぎああ」

「にゃあーごる」

* * * * *

「...では次のニュースです。

今日未明、中央区のホテルの廊下で、男性が倒れているのを宿泊客が発見し、病院に運ばれましたが、間もなく死亡が確認されました。

警察の調べによりますと、この男性はホテルの宿泊客ですが、部屋から発見された身分証明書と宿泊名簿の氏名が一致しておらず、警察は身元の確認を急いでいます。

なお男性の死因は窒息死とみられており、目立った外傷はなく、警察は事件と事故の両面で、捜査を続ける方針です。

では天気予報です。現在強風警報が各地に出ています。今日の関東地方の天気は...」

「にゃあーごる」

初出：「ねこバナ。」2009年5月21日
<http://ameblo.jp/nekobana/>

平成・鍋島猫騒動

男は意気軒昂であった。

「既にご案内のとおり、我がアール・スピーデック社が世界に先んじて開発を行ってきた超高速無線通信技術Wi-Tachが、ついに実用化へと動き出します。既存のインフラを活用し、しかも低コストで従来の五万倍の通信速度を確保できる、画期的な技術です。実用化へのロードマップはこのとおり、五年後には国際規格として普及させることが目標です。必ずや、我が社の技術は世界へと羽ばたくでしょう。お手許の資料のとおり、本事業の本格的な始動につき、ご了承いただければ幸いです。如何でしょう」

「異議無し」

「異議無し」

「ありがとうございます。これで、町工場の片隅からスタートした我が社は、世界的企業へと成長することが約束されました」

男は居並ぶ役員達に向かって、頭を下げた。

「ではこれで、取締役会を終了いたしま...」

「議長」

ひとりの役員が手を挙げた。

「はい、ナベシマ常務」

「緊急動議を提出いたします」

「なに？」

手を挙げた役員は、周りを見回し、少し震える声で、言った。

「リュウゾウシ氏は社長及び代表取締役として不適任と考えます。解任の決議をお願いいたします」

「なんだと！！」

男は愕然とした。突然、隣に座っていた副社長が立ち上がる。

「リュウゾウジ氏は、本件につき特定利害関係人となります。公正を期すため、ナベシマ・ナオズミ専務を議長として推薦いたしますが如何でしょうか」

「異議無し」

「異議無し」

「カツシゲ！ ナオズミ！ お前達、何をやってるのか判ってるのか！」

常務は男の眼を見ずに答えた。

「もちろんです。無謀な業務拡大で会社に損害を与えかねない社長の解任は至極当然のことです」

「今しがた、新事業に賛成したばかりじゃないか」

「それはまだ成功した訳ではありません。失敗すれば会社は取り返しの付かない損害を被ります」

「しかし...おい、俺は認めんぞ！ 閉会だ、直ちに閉会だ！！」

「総務部長、出席者は」

「十五名全員です」

「認められない！」

「リュウゾウジさん、異議が在れば後日法的手段をもってなさるべきです。では解任に賛成の方の起立を求めます」

十三人が起立した。

小さな町工場から、僅か十五年で世界有数の技術を有する大会社へと成長させたリュウゾウジ・タカフサは、ナベシマ一族の策略によって、会社から追放された。

「社長、おめでとうございます！」

「ナベシマ社長、これで我が社は世界一の通信事業会社になりました」

「まことに素晴らしい技術だ。通信分野の発展を十年は早めたと言われてますな」

「ぜひ、御社と弊社の技術提携を...」

「ああ、ありがとう、ありがとう」

ナベシマ・カツシゲ社長は得意満面だった。

多くの企業が、彼の会社が開発した無線通信技術を導入し、国際規格として認められ、世界中の国々に導入されることになったのだ。

折しも会社設立二十五周年を祝う祝賀会が、社屋ビルの大会議室で開かれていた。有名ホテルの大ホールにも匹敵する豪華な室内には、政財界から著名な人物が招かれていた。

少々酒に酔ったナベシマは、少しぼやけた眼前の光景を見ながら、ほくそ笑んだ。

私は賭に勝った。全てはこの時のためだったのだ。

「社長」

不意に横から呼ばれ、ナベシマはグラスを取り落としそうになった。

「あ、ああ」

「社長、少しよろしいでしょうか？」

見ると、そこにはナベシマの秘書が立っていた。

漆黒のパンツ・スーツさえ華やかに見える、とびきりの美人秘書だ。

「ああ、アマクサ君、なんだね」

「少しご相談したい事が...」

顔を寄せられ、ナベシマの助平心がぐらりと揺れた。

彼は祝賀会を抜け出し、秘書と共に社長室へと向かった。

* * * * *

「さあ、どうしたね。此処には私と君しか居ない。何でも相談に乗るが」

秘書は窓から外の夜景を見下ろしている。

「何だね、言いにくいことがあるのかね」

「いえ社長」

「ならば」

ナベシマはゆっくりと秘書に近づいた。

「昇進したいか？ 金が要るか？ それとも子会社が欲しいのか。いいとも、ただし私の...」

するりと秘書は身をかわした。

「そうではありません社長」

「な、じゃあ何だね」

「私は、告白をしたいのです」

「何？」

「私は」

「今日、あなたを破滅させに来たのですよ」

「は」

ナベシマは吹き出した。

「はははは、いきなり何を言い出すんだね。ここまで成長し、技術的にも高い信頼を得ているこの会社の、社長の、この私が、破滅だと！ ジョークならもう少し気の利いたやつを頼むよ」

「ええ、そうですね」

秘書はやや上目遣いに、彼を見据えた。

「この会社は、そう、世界に二つと無い技術をもって発展してきました。この愛すべき、私の父の会社は」

「なに？」

「私は、リュウゾウジの一人娘なのですよ」

「は？」

「あなたには昔、父のガレージで会ったことがありますよ。私はまだ三つで、あなたを父の友達だと思い込んでいました」

「ああ、あ、いやその、なんだ、そうか、しかし君、何故今までそれを黙っていたんだね」

秘書の声色が、凶悪なものへ変わってゆく。

「あなたは友達なんかじゃなかった。父と父を慕って集まってきた技術者たちの苦労を全部吸い取って、挙げ句の果てに自分のものにした」

「おいこら、私の訊いているのは」

「父がどんな死に方をしたかご存知？」

「え」

「絶望し自暴自棄になり、あんなに優しくった父が母にまで手を挙げて...そして車で家を飛び出した直後、トラックと正面衝突したのよ」

「う」

「その後の母と私の生活がどんなものだったか、あなたに想像できる？」

「...」

秘書は言葉を切り、息を軽く吸い込んだ。

「まあそれはもういいわ。とにかく私は必死だった。何が何でもこの会社に入らなければと思ってね。父の仇を討つために」

「仇って...」

「そう、あなたよ」

「ひっ」

ナベシマはたじろいだ。秘書は視線を外さずに、じりじりとナベシマに近づく。

「安心しなさい、殺しはしないから。もちろん、それよりもっと辛い目に遭ってもらうけどね」

「な、なんだと」

「あなたは最高のお膳立てをしてくれたわね。今や日本全国のパソコンやゲーム機の約五割が、Wi-Tachの無線通信システムを搭載しているわ」

秘書の片頬が、つり上がった。

「お座りなさいよ」

ナベシマは後ずさりながら、デスクの椅子に腰掛ける。秘書はパソコンを立ち上げ、モニターをナベシマに向けた。

「ほうら、ネットに繋がった。この後どうなるか、じっくりご覧なさい」

ナベシマの額から脂汗が流れた。そして、モニターと秘書の顔を交互に見遣った。

秘書は、片頬をつり上げたままモニターを凝視している。

と、

ぶつん

画面が暗くなった。

そして。

じわ。じわ。じわじわじわ。じわじわじわじわ。

画面から何かが染み出してくる。

赤黒い物体が。

これは。

「ね」

猫だ。

怖ろしい顔をした、黒猫の画像が。

赤黒い血にまみれて。七本の尻尾を踊らせて。

滲み出てきた。

「さあどうぞ、操作してごらんなさいよ」

秘書はキーボードをナビシマに押しやった。ナビシマは震える手でキーボードやマウスを操作する。が、反応が無い。

再起動してROMチェックをしようとしても、電源を切ろうとしても反応しない。

ナビシマは机の中に潜り込み、コンセントをひっこ抜き、また差し込んだ。すると。

じわ。じわ。じわじわじわ。じわじわじわじわ。

またあの画像だ。

血みどろの猫が、踊っている。

「これは」

「そう、一種のウィルスね。通信システムのROMに常駐していて、ある時間になると放出されるの。データを全て消去して、この画像を延々繰り返すだけの簡単なものよ。単純なだけに、ファイアウォールをするする抜けるテクニックは天下一品ね」

「なに！？ 今なんと」

「このウィルスは、Wi-Tach互換の通信システムのROMに常駐しているのよ。無線LANのルータ、通信カード、一部の携帯電話などにもね」

「なっ...！！」

「ふふふ、気が付いた？ そうよ。この国のゲーム機やパソコンの約五割には、今この画面が映し出されているはずね。データを全部消去されて」

「なああああああ」

「ああ、官公庁や大企業にも随分納入しているものねえ。被害は相当深刻なんじゃないかしら」

「ぐっ、お、お前！ こ、こんな事をして只で済むと思っているのかっ！！ 犯罪だぞ、重大な犯罪だっ！ おまけに我が社の信頼を損なって」

「損なうどころじゃないわよね。もうお終いよ。父の会社はね」

「いい加減にしろ！ この会社は私の会社だ！ 貴様は只の犯罪者に過ぎない、そうだ、いいか、ここを動くな、すぐ警察に突き出してやる」

「あら、どうぞご自由に。私は痛くも痒くもないわ。あなたが落ちぶれてくれればそれでいいのよ」

「ふっ、巫山戯たことを」

「それにね、このウィルスを開発したのは、私じゃないわ」

「なに？」

「あなたよ」

「な」

「忘れたの？ 二十五年前、あなたがうちのガレージで父に披露していたんでしょ？ いたずらに使えるウィルスとか何とか言
って」

「えっ」

「父の遺品を整理していたら、日記に出てきたの。ナベシマが下らないウィルスを作ってしまった。これは封印してしまわなけれ
ばならないって」

「...」

「でも、父としては惜しい気がしたんでしょね。あったわよ。今時MOディスクなんて、機械を探すのが大変だったけどね」

「そ、それは」

「私がしたのは、映し出される画像を変え、起動する日付指定を変更しただけなのよ」

「しかし」

「それにね、最終段階でこれをROMのプログラムに入れ込んだのも、あなたよ」

「う、嘘だ！ あり得ない」

「ああ、忘れちゃってるのね。これを見ってみる？ もう三年前の映像だけどね」

秘書は、携帯電話を開いて動画を呼び出し、ナベシマに突き出した。

...社長！ 次回から社長室でパーティーなんて止めましょうよ

...な、なあに、ひっく、いいんだいいんだ。アマクサ君、ほら君も飲みたまえ

...あら私はもういいです。あ、ちょっとタカギさん、下の自動販売機で、冷たいジュース何本か買ってきてくれない？

...はあ〜い

...さ、社長、二人きりですわね

...う？ ぐ、ぐふふ、なんだ、私にしてほしいことがあるのか？

...ええまあ...

...いい、いいぞ、なんでもしてやるぞ、愛人になるか？ 結婚するか？ あ、がはははは

...もう、そうじゃないですよ。ほら社長、どうぞお座りになって

...う、うう。ああ酔った、酔ったぞー

...ほら社長、この画面見て下さらない？

...う？ あ、なんだこれ？

...社長が昔作ったゲームなんですって？ すてきね〜

...あ、そうか？ あ、がははは

...ほら、これ、このプログラムに、入れちゃいましょうか？

...そ、そうか？ そうだな、あは、あははは

...やだ社長、何処触ってるんですか

...堅いこというなあはははは

...ほら、ここをぼちっと

...ぼ？ ぼ...ぼちっと

...うふふふふふ

「な...」

「この操作で、あのウィルスは二年前から開発された我が社の全製品と、技術供与された他社の製品全てに常駐することになったのよ」

「そ、そんな」

「嘘だと思うなら、ログを見てみましょうか。このパソコンのデータは全て、このディスクに収まっているから」

秘書はひらひらとディスクを振って見せた。

「き、貴様！！」

ナベシマは秘書めがけて突進したが、あっけなくかわされる。

「それとね、今見てもらった画像はね、動画サイトで目下公開中なの。運良くWi-Tachを使ってなかった人は、あなたの間抜け面を見ることが出来るでしょうよ」

「ひ、な、なんてことを」

「たちの悪いウィルス制作の前歴がある社長、女に誑かされてそれをROMに組み込んでしまう社長、そして不当に父から社長の椅子を奪った悪党」

秘書の眼がぎらりと光った。

片手でナベシマの首をがっしと掴む。

強烈な力で首が締め上げられる。

「ぐ、ぐぶぶぶぐぶぐぶ」

「あなたはもうお終いよ」

秘書はナベシマの顔をぐいと引き寄せた。

「シャー！！！」

「がはあああああああ」

どさり。

秘書は跪き、恐怖に引きつるナベシマに顔を近づけた。

「明日の朝刊が楽しみね、社長」

秘書はそう囁いて、社長室から出て行った。

まるで優美な黒猫のように。

それと入れ違いで、慌てふためいた社員達が社長室に殺到した。

ナベシマは、焦点の合わない眼で、虚空を見つめていた。

パソコンの画面では、黒い七本の尻尾を持つ猫が、踊り狂っていた。

にゃーご。

うにゃーご。

ぐるにゃーあご。

おしまい

初出：「ねこバナ。」2009年7月17日

<http://ameblo.jp/nekobana/>

3 黒猫ムーの正体

黒猫ムーの正体

本当なんです。信じてください。

事の起こりは、そう、猫です。

僕のうちに突然やってきた黒猫なんです。

玄関の前で、そいつは瀕死の重傷でした。真っ黒な毛が血にまみれて、とても痛そうでした。

ケンカに負けたのか、車に轢かれたのかはわかりません。とにかくひどい怪我で、急いで獣医さんに連れて行きました。

出血がひどいので、助からないかもしれないと言われたんです。

ところが、そいつは三日目にはほとんど回復して、ケージを叩いて餌をねだるくらいになっていました。獣医さんは信じられないと言っていました。

これも何かの縁と思い、僕はその猫、黒い雌猫を飼うことにしました。

野良猫にしてはトイレもすぐ覚えたし、よくなついたので、たぶん何処かの家で飼われていたのだろうと思いました。

家の中だけで飼っていて、とてもおとなしく、いたずらも全くしませんでした。

毎日餌の時間になると、自分で餌の皿を前足で叩いて知らせるので、利口な猫だなあと考えていました。

僕はその猫に「ムーンヌ」という名前を付けました。フィリップ・ラグノーのエッセイを読んだことありますか？ ないんですか？ それに出てくる黒猫の名前ですよ。もっとも、「ムーンヌ」なんて呼びにくいので、もっぱら「ムー」とだけ呼んでいましたけどね。

ムーは、包帯がとれてしばらくしてから、突然家からいなくなるようになりました。窓を閉め忘れたわけでもないし、外出するときに一緒に出てしまうわけでもないんです。

最初は、僕も家の何処か、例えばタンスの裏とか押入の中とか、そんなところに隠れているだけなのではないかと思いました。でも、やはりムーは外に出ているのです。なぜって、家の中にはない鳥の羽や、何かの虫の足のようなもの、果てはペンキやら奇妙な臭いのする薬品やらを身体につけてくるからです。

何度も戸締まりを確認しても、やはりムーは外出しているようでした。それでも僕は、不思議とムーを怖がったり、嫌ったりすることはありませんでした。もともと猫って動物はミステリアスで、何か人間の考えの及ばない世界を知っているように思われたからです。

僕の信頼が伝わったのか、ムーは外出していたとしても、必ず決まって、僕が仕事から帰ってくるとすぐに現れました。そして何事もなかったかのように身繕いをし、餌を食べ、僕の傍らで伸びをして眠るのです。

だから僕は何の心配もしていませんでした。

ある日、パソコンを開いてネットの記事検索をしていて、異変に気が付きました。

履歴の中に、今までアクセスしたことのない海外のサイトや、図書館、大学の蔵書検索の記録が残っているのです。

誰かが僕のパソコンを不正に遠隔操作しているのではないかと疑い、ウィルスチェックをし、プロバイダにも調べてもらいましたが、そういう不正なアクセス記録はないようでした。

また不正アクセスなら、クレジットカードや個人情報に危ないと思いましたが、そういう被害もありません。どうも奇妙なのです。

そんなことが一週間ほど続き、さすがにもうパソコンを買い換えるか、プロバイダを換えるかと思って帰宅した時です。

信じられない光景を僕は目にしました。

あのムーが、僕のパソコンを操作しているのです。

僕の机に向かって、椅子に腰掛けて、かちゃかちゃとキーボードを叩いて、マウスを操作して、鮮やかな手つきで。

まるで僕には無関心のまま、ムーは操作を続けていました。僕はただそれを呆然と眺めるしかありませんでした。

すると、ムーの手が止まり、僕の方を振り向きました。

「今日は早かったのね」

なんと、ムーは言葉を喋ったのです。

「驚かせてごめんなさい、少しずつ慣れてもらったほうがいいかと思って」

ムーはそう言うのと椅子から降り、まるで人間のように、後ろ足で立ちました。

すらりと伸びた美しい肢体は、まるで映画に出てくる女優のようでした。緑の大きな目は、魅力的で、じっと僕を見つめています。

僕は言葉も出ずに、その場にへたりこんでしまいました。

「今日で私の任務は終わり。これから母船に帰らなければならないわ」

僕はムーの言うことが全く理解できませんでした。母船って何だ？

「ああ、順序だてて話したほうがいいわね。私はこの星の生物ではないの。植民星を探す開拓団の職員として派遣されたのよ。私達の外見が、この星の生物、あなたたちが呼ぶ「ネコ」に似ているから、潜入には好都合だったわ」

つまり、ムーは、彼女は宇宙人だということです。

「私の他に職員は多数展開して、この星に関する生態系や資源、生物の文化・技術レベルの情報を調べていたの。分析の結果、この星の植民星としての価値はあまり高いものではないけれど、生物実験には適しているわ。だから地上の生物数をある程度制限した上で利用することにしたの」

どういうことか僕には全くわからないまま、彼女の説明は続きます。

「あなたの情報端末を使って、この星にある大量破壊兵器や迎撃システムを全て操作不能にしたの。どうせたいした物ではないだろうけど、被害は最小限に食い止めないとね。で、近々母船から、生物を処理するための作業艇がこの星に向かってくるわ」

つまり、彼女らは、地球の生物を抹殺して、植民地にしようとしているということです。

僕はまだ口もきけずにいました。ムーの顔を見つめたまま。

「母船の首脳部の決定では、ニンゲンは全て殺処分することになっているわ。でも、あなたは私に協力してくれたし、何より命を助けてくれたものね。だからあなたは生かしておいてあげる」

そう言ってムーは、僕の目の前まで歩いてきて、僕の胸のあたりを、ぽん、と叩きました。

「ここ、心臓の大動脈付近に識別ユニットを埋め込んでおいたの。だから作業艇の攻撃も、あなたを避けてくれるはず。明後日には生物処理作業が始まるでしょう。作業が全て終わったら、私がシャトルで迎えに来るから」

ムーは僕に顔を近づけ、目を細めました。そして恐怖と驚きで硬直した僕の顎を手で持ち上げ、

「じゃあね、私のおバカさん」

そう言って、瞬く間に消えてしまいました。

そうなんです。今日がその、処理作業の日なんです。嘘なんかじゃありません。夢でもないんですってば。

嘘だと思えば、僕の身体を調べてみてください。ムーが僕の身体に仕込んだ識別ユニットがあるはずですよ。早くしないと、みんな殺される.....

* * * * *

「どうだい、警察から回されてきた患者は」

「どうもこうもない。ただの誇大妄想としか思えないね。もっとも、会話に破綻がないところは注目すべきだが」

「しつこく、胸のあたりを検査しろと言ってたんだろ？」

「もちろんMRで検査してみたさ。何も無いよ。ま、大動脈にくっつくように小さな嚢腫が見つかったがね。胸部専門のドクター

に診てもらったが、ただの水ぶくれだ」

「そうか。じゃあD病棟で様子を見ることになるかな」

「そういうことだ。全くやっかいなものを...」

「どれ、遅めの昼飯でも食べにいくか」

「空がやけに暗いな...雨でも降りそうだ」

「向こうは晴れてるぞ」

「おい、何だあれ？」

「ん？」

「上だよ」

「雲じゃねえの？」

「違う...もっとでっかい...塊だ」

「鳥の大群...いやもっと、もっと多いぞ...な、なんなんだ一体」

「塊に...空が...覆われていく....」

おしまい

初出：「ねこバナ。」2009年6月15日

<http://ameblo.jp/nekobana/>

4-1 白猫伝説 海と白猫

白猫伝説 海と白猫

「どっからせ」

まるで老人のような声を出して、私はホームのベンチに腰掛けた。

ほとんどペンキがはがれている、くたびれたベンチ。

その一帯だけ、背後の小さな木造駅舎のおかげで、陰が出来ている。

私は手拭いで、無精髭の生えた顎を拭って、ほう、と息をついた。

人っ子一人いないこの駅で、私はぼんやりと、車を待っていた。

* * * * *

じいじいじいじいじいじいじい

虫の音がどんどん高くなる。

日差しが風景を灼く。

濃い緑が、さらに濃さを増してゆくようだ。

その濃い緑の向こうには、ちらりと見えるのだ。

藍を沈めたような、海が。

まるでお椀のような形に見える、藍色の海。

その上には、白い雲が、ほわほわと浮かんでいる。

綿菓子のようなあの雲は、焼け焦げてしまわないのだろうか。

こんなに日差しが強いのに。

私は木造駅舎の日陰に埋もれて、ぼんやりと、車を待っていた。

* * * * *

「暑いですね」

声を掛けられて、ふと横を見た。

大きな白い帽子を被った、白いワンピースの女性が立っていた。

帽子の先が、眩しいくらい白く、陽射しに輝いている。

そよそよと海から吹く風に、長い髪がなびく。

「ええ」

私は生返事をして、視線を海に戻した。

「どちらまで行くのですか」

「さて、決めてはいません」
「この町は如何でしたか」
「どうということは」
「何故この町に来たのです」
「大した用ではありません」

私は視線を下に向けた。
靴の下で、砂がじゃり、じゃりと音を立てた。

「夏がお嫌いなんですね」

問われて、私は顔を上げた。

「ええ」
「なのに、ひとりで旅をするなんて」
「おかしいですか」
「ええ、とつても」
「そうですね」

苦笑しながら、私は海をじい見つめた。

じいじいじいじいじいじいじい

虫の声はどんどん高くなり、辺りは賑やかになってゆく
陽射しはずんずんと高くなり、辺りは光に覆われてゆく。
私は相変わらず日陰に埋もれて、ぼんやりと、汽車を待っていた。

* * * * *

「神社を、見に来たのです」

ぼつりと、呟いてみた。

「神社ですか」
「ええ。此処の神社には、白猫にまつわる言い伝えがあると聞いたもので」
「どんな伝説ですか」
「海を鎮める猫とひとりの漁師の、悲しい恋物語です」
「それで」
「はい」
「何か、見つかりましたか」

「いいえ、何も」

私は首を振り、空気を吐き出した。
少しばかり、アルコールの霧が混じっていた。

「何も、なかったのですか」

「はい」

「さぞ、がっかりなすったでしょう」

「いいえ」

女性は私に顔を向けた。私は視線を感じながら、まだ海を見ていた。

「がっかりはしません。伝説とか言い伝えとは、そういうものです」

「そうなのですか」

「はい」

「悲しいですね」

「何故です」

「いつか、忘れ去られてしまいそうで」

「そんなことはありませんよ」

私はそう呟いた。まるで独白のように。

「そうですか」

「ええ。忘れ去られることはありません」

「本当でしょうか」

「本当ですとも」

じいじいじいじいじいじいじい

私は目を閉じた。

じいじいじいじいじいじいじい

虫の音が私の脳内を支配した。

確信はあったのだ。

「忘れやしませんよ。少なくとも私はね」

そう呟いて、私は横を向いた。

* * * * *

「みゃあお」

白い猫が、日陰に佇んでいた。

「忘れやしませんよ」

私は猫に向かって言った。

すると猫は。

「みゃあお」

高く啼いて、私を見つめた。

夏の青空のような、青い眼と。

夏の陽射しのような、黄色い目で。

「あなたには、夏が似合うようですね」

私はそう言って、笑った。

そして。

「あなたのおはなしを書きますよ。近いうちに、きっと」

と告げた。

「みゃあお」

白い猫は満足げにそう啼いて、海へと視線を向けた。

ごんごん、ごんごん。

遠くから汽車の音が聞こえて来た。

私はまた、

「どっこらせ」

と声を出して、荷物を抱え上げた。

そして顔じゅうを手拭いで拭ってから、

「ではまた会いましょう」

そう、白い猫に告げたのだ。

「みゃあお」

猫は、ちんまりと座ったまま、静かに私を見ていた。

* * * * *

がたごとがたごとがたごとがたごと

じいじいじいじいじいじいじいじい

酷い音を立てて汽車がやって来る。

汽車の音に負けじと、虫が啼く。

一瞬、私は光の中に踏み出した。
辺りは、白く弾け飛んでいるように見えた。
その彼方にある、お椀型の海が。

「みゃあお」

私には、酷く冷たそうに見えたのだ。

つづく

初出：「ねこバナ。」2010年7月17日
<http://ameblo.jp/nekobana/>

4-2 白猫伝説 昔話

白猫伝説 昔話

ねこは みずが きらいと よく いうが
むかしは たいそう みずが すき だったんだと
うみに もぐって さかなを とったり
ゆったり およぎを たのしんで いたんだと

なんで ねこが みずに はいらんように なったか
それを はなして やろうかの

* * * * *

むかあしむかしの そのむかし
うみが とっても よくみえる
むらの おやまの ちゅうふくに
ちいさな やしろが あったんだと

その おやしろには
うみの かみさまが まつられていて
その けんぞくは しろい ねこ だったんだと

むらの りょうしは りょうに できる まえに
かならず その おやしろに おまいりして
たいりょうを ねがったんだと

* * * * *

ヘイタは このむらの わかい りょうしで
たいそう はたらきもの だったそう
みよりのない ひとりぐらしで
びんぼうだったが きだてのいい おとこだったそう
ただ ちいさい ころの やまいの せいで
くちが きけんかったそう

あるひ ヘイタは いつものように
りょうに しようと ふねを おそうとした
すると

ふねの なかには
ぐったりと よこたわる しろい ねこが
きずだらけで いたえだえの しろい ねこが おった
ヘイタは びっくらこいて ねこを かついで
むらの じいさまの ところへ つれていった

その しろい ねこは
みぎめが ぴたりと とじたままだった
ひだりが ひのひかりのような きんいろを しておった
それをみた じいさまは
これは うみの かみさんの つかいだから
ようく かいほう しておあげと いった

ヘイタは いわれたとおりに
かいがいしく ねこの せわを した
きずぐちを ふいたり
さかなを たべさせたり
しもの せわを したり

ひとつきも たたんうちに
ねこは すっかり げんきに なった
じいさまは ヘイタに いった
ねこが げんきに なったなら
やまの おやしるへ つれて いきなさいと

ヘイタは ねこを せなかに しょって
おやまの おやしるへ のぼっていった
そうして ねこを おやしるの まえに
そうっと おいて あげた

ねこは たいそう なごりおしそうに ないた
ヘイタも たいそう なごりおしかつたけれど
やがて ゆっくり やまを おりていった

* * * * *

それから ふたつきばかり たった あるひ
ヘイタは いつものように
りょうに しようと ふねを おそうとした
すると

ふねの なかには
ぐったりと よこたわる
ひとりの おんなのひとが
いきも たえだえの おんなのひとが

ヘイタは びっくらこいて
おんなのひとを かついで
じぶんの いえへ つれていった
そうして じいさまを よびに はしった

おんなのひとは

すきとおるような しろい はだをして
かみのけは あおびかり するほど くらかった
みぎの めは ぴったりと とじていて
ときどき ヘイタをみる ひだりの めは
ひのひかりの ような きんいろを していた

じいさまは ヘイタに いった

かいほうして やるのは いいが
よそもんは ここには おいておけない
げんきに なったら でていって もらえ と

ヘイタは いわれたとおりに

かいがいしく おんなひとの せわを した

その おんなのひとは

シヲネ と なのった
どこからきたのか
じぶんは なにものなのか
すっかり わすれて しまったんだそう

ひとつきも たたんうちに

シヲネは すっかり げんきに なった
ヘイタは シヲネをつれて
じいさまの ところへ でかけていった

シヲネは じいさまに いった

あたしには かえるところが ないので
ごめいわくで なければ
あたしを ヘイタさんの ところに
おいて いただく わけには まいりませんか

じいさまは うんうん うなって いたが

ようし わかった
ただ おまえさんは よそもんだから
いちねん ヘイタの ところで なにごともなく くらすまでは
めおとに なる ことは ゆるさんぞ と いった

* * * * *

それからというもの

ヘイタは はりきって りょうに でかけ
シヲネは ヘイタを かいがいしく ささえた

ふしぎなことに

シヨネが ヘイタを ひきとめた ひは
きまって うみが しけたのだ
シヨネが うけあって ヘイタを おくりだした ひは
どんなに うみが あれていても
そのうち ぴたりと なみは おさまり
さかなが たんまり とれたのだ

むらの みんなは びっくらこいて
いつのまにか
ヘイタに ならって うみにでる
ヘイタの まねして りょうをやすむ

そんなふうになつていった

ヘイタと シヨネの くらしは どんどん らくになり
ふたりは いっそう なかようになった

* * * * *

それが おもしろくない おとこが おった
むらの らんぼうもの キハチだ

ろくに くちも きけねえくせに
おいらより かせぎが いいなんて
きにくわねえ

むらの じいさまは
いちねん なにごともなく くらせば
シヨネは ヘイタと めおとに なれると いった

ちょうど あさって その いちねんめが くるのだ

そうは させるかと
キハチは ヘイタが りょうに でたあと
ヘイタの いえに むかった
そうして シヨネに らんぼうしようと おそいかかった

ひっしになつて あばれる シヨネを
キハチが なぐろうとした そのとき

ずっと つむつたままだつた
シヨネの みぎめが ひらいた

ぱっくりと あいた そのめは
それのような あおい いろだつた

シヲネは ものすごい ちからで
キハチを はりとばした
キハチは とぐちまで すっとんだ

キハチは みた
シヲネの くちには
するどい きばが
シヲネの てには
するどい つめが

キハチは にげだして
むらの じいさまの ところに かけこんだ
じいさま シヲネは ばけもんだ
あんなもん むらに おいといたら えれえことになる

キハチは じいさまを ときふせた
そうして むらに のこっていた おとこしゅうと ともに
もりや おのを もって
ぞろぞろと ヘイタのいえに むかっていった

* * * * *

りょうから もどった ヘイタを むかえたのは
あおいかおをした シヲネだった

ふたりの まわりには
むらの おとこしゅうが ぞろぞろ あつまってきた

そいつは ばけもんだ おめえ とってくわれるぞ

どんなに おとこしゅうに いわれても
ヘイタは シヲネを はなさない
そうして
シヲネの てを ひいて はしりだした

おとこしゅうは やりを てにして おってくる
ヘイタと シヲネは ひっしに はしった
すなはまを ぬけ がけを のぼって
とうとう
むらはずれの みさきに おいつめられた

じりじりと おとこしゅうが ヘイタと シヲネを おいつめる
キハチが おのを ふりあげて
シヲネに おそいかかった

ヘイタは シヲネを とっさに かばった
にぶい おとがして
ヘイタの せなかに
おのが つきたった

おまえさん

シヲネが さけぶと
シヲネの みぎめが あいた
あおい めが ぎらりと ひかり
しろい けに おおわれた うでが
キハチを はりとばした

キハチは みさきの がけから
まっさかさまに したに おちていった

シヲネは すっかり
おおきな しろい ねこの すがたで
ヘイタを だきかかえていた
ヘイタは

シヲネの しろい ほほを
そうっと なでて

それきり ちからを うしなった

あれは しろねこ
うみの かみさんのつかい

おとしゅうが つぶやいた

シヲネが ゆっくり たちあがる
うなりながら たちあがる
きんいろの めが ひかる
あおい めが ひかる

おとしゅうは おそれ おののいて ひれふした

シヲネは てんに むかって おおきなこえで さげんだ
とたんに

はげしい かみなりが なり
じめんが おおきく ゆれた
そうして
うみのかなたから

やまのような つなみが おしよせた

シヲネの りょうめから こぼれる なみだと ともに
ヘイタも
おとしゅうも
ちいさなむらも

ぜんぶ つなみに のみこまれて しょうた

* * * * *

いきのこった かずすくない むらびとは
やまの ちゅうふくの おやしるに
シヲネを おまつり したんだと

あらぶる シヲネの たましいが
しずまりますように と

ただ

ねこたちは

シヲネの かなしい きもちを おぼえていて
それからというもの
うみに はいることは しなく なったと いうことだ

とっぴんぱらりのぶう

* * * * *

この話を ××村の古老から聞いたのは、昨年八月のことだった。

話の中に出てくる「山の中腹の社」は今ももうなく、明治の初めに麓の△△神社に合祀されたのだという。にもかかわらず、この村の人々にとって、白猫は相変わらず畏怖の対象であるようだ。話を聞いた古老も、まるで見て来たかのように、滔々とその悲しい物語を語るのだ。私にはそれが不思議でならなかった。いつとも知れぬ遠い昔の、しかも本当かどうか判らない伝説ではないか。

私が率直にその感想を話すと、古老は俯いて、少し辛そうに話してくれた。
この村では、この物語によく似た出来事が、最近あったばかりだというのだ。

最近といっても、それは古老の感覚である。
戦争が激しくなる、昭和十九年の冬、その出来事は、この村で起きた。

つづく

白猫伝説 聞き書き

1 xx村△△地区 T男さん（元自治会長 86歳）

「私は身体が弱かったので、徴兵検査は三種合格でした。それに家が網元をしておりましたので、家の仕事で忙しく、兵隊にとられなかったのは幸いでした」

「この村の屈強な漁師達も、だんだんと兵隊にとられていきました。お国の為とはいえ、仲間がいなくなるのは寂しいものです。最寄りの駅までみんなで行進し、万歳三唱をして送り出すのも、私にとっては悲しいことでした」

「兵隊にとられずに残った男達の中に、ヘイジという者がおりました。彼は幼い頃罹った熱病のせいで、その...少しばかり知恵が遅れていたのですな。言葉もあまり喋れず、村の者達からは馬鹿にされておりました。それでも大層人の良かった彼は、力仕事を率先して引き受け、少なくなった男手を十分に補ってくれましたよ。なのに、ひとりぼっちでね。よく網小屋の陰で、猫を抱いてぼうっと海を見ている姿を、眼にしました。」

「あれは...そう、昭和十九年の夏。暑い日でした」

2 同 S子さん（76歳）

「あたしゃまだ国民学校の三年生だったけど、今でも憶えているよ。ヘイジがひとりの女の人を、こう（肘を張って持ち上げる真似をしながら：筆者註）担いでさ。慌てて網元の家へ駆け込んでいったのさ」

「みんなぞろぞろ網元の家を集まってね。いったいどんな人だろうと、押し合いへし合い見ようとしたんだ。あたしゃ小さかったから、するすると人垣をかきわけて、板の間に寝かされたその女の人を見たよ」

「真っ白な服を着て...所々汚れてはいたけれど...。うん、あんな服は見たことなかったね。まあ田舎だからねえ。傍らには帽子が置いてあったよ。大きなツバのついたやつさ」

「びっくらするほど白い肌でさ。あたしゃもう死んでしまっているのかと思ったけれど...。とにかく、すぐに女の方は奥の間に運ばれてったよ。そうしてヘイジは、隣町まで医者を呼びに走ったのさ」

3 同 M和さん（71歳）

「俺はそんな時のことは、ほとんど憶えてないがね。ただ俺の母ちゃんが、網元とこの手伝いをしてたもんでね。母ちゃんが言うには、ありゃあ外人じゃねえかってさ」

「髪の毛は黒いんだが、眼がさ。右目はつむったまんまなんだが、左の眼が、こう、俺達みてえな色をしてねえんだと。金色ってえか、虹色ってえか。とにかく、明るいきれいな色をしてたんだそうさ」

4 T男さん

「女の方は自分の名前も、何処から来たのかも、忘れてしまっているようでした。そのうえ言葉がおぼつかなくて、まあ外国人のように見られても、無理はなかったでしょうねえ。もちろん医者といっしょに、隣町の巡査が来ましたよ。スパイじゃなかるうかって、いろいろ尋問してたようですが、とりつく島が無くて、諦めて帰りました。もっとも、彼女の動向は逐一報告するように、と言い置いていきましたが」

「ヘイジは、彼女のことを随分心配しましてね。毎日魚を捕っては届けて行きましたよ。そのお陰かどうか知りませんが、彼女は

どんどん元気になりましてね。二週間ばかりして、おぼつかなかった言葉もはっきりしてきて、外にも出られるようになりました」

「ただ、彼女をいったいどうしたものかと、村長と父が話していました。私は、あんな弱そうな身体なのだから、癲狂院かサナトリウムから逃げて来たのでは、と思って、そうした処に手紙を書いてみたことがありました。ところが、届いた返事はどれも、逃げ出したような人は居ない、というのです」

5 S子さん

「ヘイジがその人を連れて、網元の家から出て来るのを、あたしゃ見たんだよ。どうやらあの人はヘイジとここで暮らすらしいぞ、ってね、まわりの大人が噂してたんだ」

「まるで、お人形さんの手でも引くようにしてさ。ヘイジが恐る恐るその、細くて白い手を引いてるんだよ。なんだか可笑しくってね。みんなもからかって笑ったもんさ。女の人は、恥ずかしそうに俯いて、それでも何も抵抗せずにね。大人しくヘイジについていったよ」

6 T男さん

「どうしてそうなったのか...今となってはよく憶えていないのですが。彼女が父や村長にそう頼み込んだのでしょうかね。私の家にも、身元の判らない者を置いておくことは出来なかったし、ヘイジの家ならば何事が起きてもすぐに対処できるし...そうした目算もあったのでしょうか」

「そして、彼女には名前がついたのです。チナミ、とね。ええ。ヘイジがそう呼んだのですが...なにやら詩的な響きがありましたので、ヘイジにそんなセンスがあるとは、はは、私もちょっとびっくりしたのですよ」

7 同 Hルさん (74歳)

「私の家はヘイジの隣でね。うちの父が兵隊にとられてからは、ヘイジがよく家のことを手伝ってくれたので、母はそりゃあ、助かっていましたよ。でも私は、みんなが馬鹿にするヘイジと仲良くするのは、ちょっと躊躇われましたね。今思えば可哀想なことをしたと思いますけど...」

「チナミさんが来てからは、ヘイジはそりゃあ、以前にも増して張り切って仕事するようになりました。多少海が荒れていても漁に出て行きました。チナミさんは漁師の仕事は初めてのようだったので、母が網の繕いやら、魚の捌き方やらを、よく教えてあげてましたよ」

「ヘイジはたくさん魚を捕ってきて、私の家にも分けてくれました。うれしそうにチナミさんに魚を見せるヘイジの顔は、まあ、幸せそうでしたねえ。それに、夏の陽射しの中でにこにこするチナミさんの、まあきれいなこと。あんなに白い肌なのに、夏が似合う人だなあって、思いました。ほんとに幸せそうで」

「あんなことが起きるまでは...」

8 M和さん

「俺が憶えているのは...村はずれの草むらで遊んでいた時だ。兵隊にとられなかった村の若い衆が二、三人、集まって何か話をしておったよ。ヘイジの野郎がとか、あの女がとか、やけに物騒な口調だったことだけはよく憶えている。俺あ怖くなって逃げたんだが、後ろから大きな声で怒鳴られてね。泣きながら家まで走ったさ」

「今思えば、あれは...」

9 T男さん

「その年の十二月に入ったばかりの頃です。村の若い衆が突然、私の家に飛び込んで来ましてね。ヘイジのところにいるチナミが、化け物だと言うんですよ」

「なんだか突拍子もない話で、私は彼等を落ちつかせて話を聞いたんですが...どうも信じられませんでねえ。だってそうでしょ。ぎらぎら眼が光っただの、怖ろしい声を出しただの、鋭い爪が伸びただの。彼等はヘイジの家に行ったら、彼女がいきなり襲って来たと言うんですが...」

「そうしたら、今度はヘイジが飛び込んで来ましてね。彼等がチナミに乱暴したんだと、怒り狂って居るわけです。私はそこで合点がいったので、もしヘイジの話がほんとうなら、若い衆達を警察に突き出す、と言いました。そうして、ヘイジにはチナミを此処に連れて来るようにと、言ったのです」

10 S子さん

「たぶん、その頃だったと思うんだけどねえ...」

「あたしゃ、見たんだよ。ヘイジの家からさ。白い猫が出ていくのを」

11 Hルさん

「母がヘイジの家に声をかけにいったら、チナミさんはいなかったんだそうです。男達に乱暴されたような跡も、なかったと言っていました」

「やけに猫が啼いてるねえ、とも、言っていました...」

12 T男さん

「家から戻ったヘイジは、動転してしましてね。チナミがいない、いないと繰り返すんです。そしてあの若い衆達に殴りかかろうとするので、私は必死に止めました」

「その時です。家の戸口に、見慣れない人々が立っていました。隣町の巡査が、その陰でびくびくしていました」

「彼等は東京から来た、陸軍参謀本部の面々でした。どうしてこんな田舎の村に、と問いかけようとしたんですが、時間がない。あの女は何処だ、と言うのです」

「私は何のことだか判らず、訳を話してくださいと頼んだのですが、ただ問いに答えろの一点張りで。私は、彼女がいなくなったと告げました。すると彼等は血相を変えて、村中を探せと私に命じたのです。あの若い衆達は、これ幸いとその軍人たちの手先になって、チナミを探し回りましたよ」

「そうして私は、何時の間にか、ヘイジがいなくなっているのに、気が付いたのです」

13 Hルさん

「ヘイジが、私の家を覗いて、そして自分の家に駆け込んで、チナミさんの名を呼んで、物凄い勢いで走って行きました。私はどうもヘイジの気がふれたんじゃないかと思って、怖かったのを憶えています」

「走っていった先には、村全体を見渡せる小高い山と、そこから突き出た崖がありました」

14 M和さん

「おっかなかったよ。黒っぽい軍服を着た連中が、村の若い衆に大声で命令しながら、家という家を家捜ししてるんだからね。俺
あ母ちゃんにしがみついて、ただ泣いてたんだ」

15 T男さん

「誰かが叫びました。ヘイジはあっちに走っていったぞ、とね。彼等はすぐにその方向へと走ってゆきました。私はただそれを追
いかけるので精一杯で...いや、昔から走るの苦手なんです」

「私が息を切らして坂を上りきると、崖の上に、追い詰められたヘイジとチナミが、立っていたのです」

「彼等がチナミに何を言っていたのかは...私には...判りませんでした」

「チナミは、何かを言われて、仕方なく、彼等のところへ歩いていこうとした、ように見えました」

「それを、ヘイジが引き留めたのです」

「いっちゃんねえ、と」

16 S子さん

「何が破裂したのかと思ったよ」

「ばあん、って高い音が、辺りに響いてね」

17 T男さん

「ああ、今でもはっきり憶えていますよ」

「ヘイジの胸から、血が噴き出すのを」

「軍人のひとりが、拳銃を撃ったのです」

「判りません。何故彼等がそんなに焦っていたのか」

18 S子さん

「その次に聞こえて来たのは、叫び声さ」

「耳をつんざくような、激しい声がね」

19 Hルさん

「狐の鳴き声かなと私は思いました」

20 M和さん

「俺は...憶えてねえなあ」

21 T男さん

「チナミは、倒れ込むヘイジを抱えて、激しく叫びました」
「私もびっくりするくらいの、大きな声でした」
「辺りにその声が響いて、私は思わず、耳を塞ぎました」
「声が止んでも、チナミは震えているようでした」
「軍人達が拳銃を構えて近付こうとした、その時」

22 S子さん

「物凄い揺れだったよ。天地がひっくり返るかと思うくらいにね」
「家の中はもう大変なことになって、箆笥は倒れるわ壁は壊れるわ。怖くって怖くって」

23 Hルさん

「酷い揺れが収まってから、母が叫んだのです。津波が来る！ って」

24 M和さん

「母ちゃんは俺を抱えて、走り出したんだ」

25 T男さん

「私は必死に、崖の地面にへばりつきしました。村の若い衆は、何人か崖から落ちてしまいました」
「揺れが収まって、私はゆっくり顔を上げてみました。すると」

26 同 I郎さん(92歳)

「あの おんなの めが ひらいた」
「とじていた みぎのめだ」
「うみみてえな そらみてえな」
「あおい め だったあ」
「おれあ おそろしくて おそろしくて」
「あれあ うみの かみさんの」

27 T男さん

「私は...憶えていないのです。ただ、隣に居た若い衆が、そう叫んだので」
「私が憶えているのは」

「波が寄せるような、何かを引き裂くような」

「怖ろしい、チナミの声でした」

28 I 郎さん

「ああああおそろしい」

29 T 男さん

「私は、はっと我に返りました。大きな地震のあと、この辺りはよく、津波に襲われるのです」

「早く逃げろと、私は叫びました。何人かはその声に反応して走り出しました。しかし」

「軍人達とチナミは、何故か逃げないのです」

「チナミを引っ張って逃げようと、私は進み出ました。すると軍人達がそれを阻んで、言うのです」

「もはやこれまで、と」

「そうして銃口を、チナミに向けました」

「チナミはそのとき」

「優しくヘイジの顔を、撫でていました」

「そうして、海の彼方から、山のような津波がやって来ました」

「どす黒い色をした、怖ろしい津波が」

「私はもう、彼等には構ってられないと思い、走りました」

「必死に山道を登りました。他の村人達も、付いて来ました」

「あの小さなお社があった、山の中腹に辿り着いた時」

「私は村人とともに、村を見下ろしました」

「津波は、何もかも、飲み込んで行きました」

* * * * *

「可笑しいと思うでしょう」

T 男さんはそう言って笑った。そして直ぐに真面目な表情になり、

「あの時の軍人達がいったい何者なのか、今となっては判りません。そしてチナミがいったい何者だったのかも。チナミはもしかして、軍に関係する重要な人物だったのか。あるいは...いや、あまり詮索するのは止みましょう。もう誰も知る術が無いのですから」

と、溜息をついた。

昭和十九年十二月七日。東海地方を襲った地震と津波については、軍部の報道管制のため、当時は被害状況が正しく報道されることはなかった。そのせいだろうか。この村の人々は、白猫伝説とあの出来事を、密接に結びつけて記憶している。

「馬鹿馬鹿しいとは思いますがね。しかし、そうでなければ説明が見つからない事柄が多いのでしょう。人間は何事にも、理由を求めたがる。そして私もね」

T男さんはそう言って、窓の外に目を遣った。
入道雲が、もくもくと湧き上がっていた。

* * * * *

私は車を待っていたのだ。
木造駅舎の日陰に埋もれて。

「暑いですね」

声を掛けられた、ような気がして、ふと横を見た。

白い帽子と白いワンピースの女性が。
白い猫に重なった。

「みゃあお」

暑い夏の妄想が、私の脳を支配した。

おしまい

初出：「ねこバナ。」2010年7月19日
<http://ameblo.jp/nekobana/>

5 黒猫の居る部屋

黒猫の居る部屋

青い畳の上には、黒猫が居たのだ。

青緑の草っ原の真ん中に、墨の一滴をひと垂しでもしたやうに、ぼつねんと居たのだ。

僕は暫し其光景を、呆然と眺めて居た。

「どうぞ、お座り下さいな」

僕は原稿を貰ひに来た丈けなのだ。

それがこんな奥の間に通されて、開け放たれた部屋の向ふに、黒い猫を見せられるなど想像もしなかつた。

だから、奥方（だと僕は思つてゐた）の勧めの声も、耳には直ぐに届かなかつた。

慌てて僕は座布団を押し遣つてその場に座したが、奥方はズイと座布団を勧める。仕方なく、まるで仏壇の鈴にでも成つた気分、僕はその分厚い座布団に座つた。

「良い猫でせう」

奥方は涼しげな声で云ふ。僕はハアと間抜けな返事をした。奥方はそれを聞いて可笑しさうに笑ふ。

「だって、貴方はずっとあの猫を見て居るぢやありませんか。屹度魅入られてゐるのでせう」

猫に魅入られるとは何処か謎めいてゐる。抑も僕は猫を見に来たのでは無い。社から原稿を頂きに参つたのだと奥方に告げると、奥方はマア、と高い声を上げた。

「旦那様は暫くお帰りにはなりませんの。ひと月前に旅に出て了はれたのですわ。行先は私にも判りません」

其んな話は初耳だ。僕は慌てて主人の戻る日を訪ねたのだが、何時戻るかは判らぬと云ふ。

「マア其れよりも、ごゆつくりなさみましな。今お茶を淹れて参ります」

奥方はさう云つて去つた。僕はホウと溜息をつき、顔を上げると。

黒猫が此方をジイと見て居た。青い畳の真ん中で。

長い尻尾がユラリと揺れてゐる。

金色の眼の奥に、縁側から差込む光が弾けた。

僕は又しても、猫の姿に見入つて了つたのだ。

じわりと青畳に黒猫が滲む。

じわり、じわりと黒猫の輪郭が溶けてゆく。

僕の脳内は、黒い滲みで満たされやうとしてゐたのだ。

心地良い。この心地良さは何だらう。

僕は。

「サアお茶をどうぞ」

我にかへつた時、僕は腰を浮かし掛けてゐた。

「何うかなさりましたか」

奥方は首を傾げて僕を見る。僕は只首を振つて、微温い茶をズグと啜つた。

「若しご迷惑でなければ、明日も又いらッしやゐましな」

旦那様が戻つて来るやもしれませぬ、と、奥方はニコリと笑つて云ふ。

僕は矢張、ハアと間抜けな返事をする外無かつた。

* * * * *

橙色の光の中に、黒猫は居たのだ。

オレンジを溶かしたペンキで塗つたやうな部屋の真ん中に、夕陽が焼焦げを作つたかのやうに、黒猫は居たのだ。

僕は又、呆然と立ち竦んで、その光景を眺めて居た。

奥方は又僕に座布団を勧める。僕は今度は何の躊躇いもなく其処に座した。

僕が座した正面には、猫が居る。開け放たれた襖の丁度真ん中に、黒猫が居る。

奥方は、主人は今日も帰らないと云ふ。さうして又微温い茶を僕に差出す。

僕は其言葉をボンヤリと聞いてゐた。イヤ聞こへてゐたか何うか疑はしい。

其れよりも、其んな事よりも僕は、眼を奪はれてゐたのだから。

夕陽が色を濃くしてゆく。

猫はピタリと影絵のやうに動かない。その輪郭がジジジジと焦げる。

アアあれは猫の影だ。影は焦げと成つてズイと伸びて行き、部屋を斜めに切取つた。

さうして、部屋をジジジジジと焦がしてゆく。音がする。

焦げは部屋いつぱいに広がつて、僕の鼓膜を揺らした。

ジジジジジジジジ

「お茶はいかゞです」

奥方の言葉を聞いた時、僕は四つん這ひに成つてゐた。

姿勢を低くして、何かを狙つてゐたのだ。

僕は一体何うしたのだらう。

震える手を見つめて息を荒げてみると、奥方が云つた。

「お疲れなのでせうね。明日又おいでなさゐまし」

奥方の眼の奥で、夕陽が弾けた。

* * * * *

青白い光の中に、黒猫は居たのだ。

童謡にある砂漠の如く青く輝く部屋の真ん中に、深海の底に揺れる海草のやうに、黒猫は居たのだ。

僕は最早、崩れ落ちるやうに座布団に座り込んだ。

奥方はすいと消えて了つた。

僕の目の前には、八畳程の部屋。其の真ん中には黒猫。

只其れ丈けなのだ。なのに。

僕はその猫の姿に、ギユウと掴まれてゐるのだ。これ以上無く強い力で。

猫の輪郭が月明かりに揺らめく。

長い尻尾と長い影が重なる。

金色の眼が、銀色の月光を反射した。

ずんずん猫が近付いて来る。

イヤ違ふ。近付いてゐるのは僕の方だ。

僕は四つん這ひに成つて猫の側へと近付いて。

鼻面を、擦り付けた。

湿つた感触が鼻をくすぐる。さうしてズルリと頬を撫でる。

黒猫は僕のまはりをユラリと揺れる。僕も猫のまはりをユルリと巡る。

「なあお」

「まあお」

月明かりは益々黒猫を滲ませる。

滲んだ其の姿は畳に溶けて行く。

僕は滲みに顔を擦り付け。

「まあおおおおおうう」

黒く青く沈む猫のなかへと、溶けて行つたのだ。

* * * * *

僕は部屋の真ん中に座つて居たのだ。

青白い畳の部屋の真ん中で。

涼しい風が、するりと吹き抜けて行つた。

「どうぞ此方へ」

奥方の声がして、襖が開いた。

僕の正面には、一人の若い男が居た。

僕を凝視して居る。

「お茶を淹れますね」

奥方は去つて行つたが。

男は僕をジイと見てゐる。

僕に、魅入られてゐる。

僕は長い黒い尻尾をユラリと動かして。
彼を、誘ったのだ。

おしまい

初出：「ねこバナ。」2010年9月14日
<http://ameblo.jp/nekobana/>